

かささぎ 通信 第47号

2016年7月8日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一六年六月の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』昭和9年8月号初出の

「めぐりあひ」(河本宇吉)を読みました。

(森三郎童話選集「かささぎ物語」にも掲載されています。)

「めぐりあひ」は久しぶりに江戸時代を舞台にした作品です。名義は目次では芳村末雄ですが、本文では河本宇吉になっています。目次と本文の名義が違う例は今までも何例もありました。(昭和7年3月号、4月号、5月号)

「めぐりあひ」は、江戸の馬喰町の両替屋の銭箱の中にいた四文銭と二文銭の兄弟の話です。初めに弟が両替され店を出ていきます。その後、兄の四文銭も両替屋から離れて様々な旅をすることになります。最後には元の両替屋で兄弟は再びめぐりあひ、もう離れ離れにならないよう、ぴつたりとくつついているという話です。

丁度この「めぐりあひ」を下準備で読んでいた頃、西尾市岩瀬文庫の企画展「江戸キャラクター図鑑」で、唐来三和(参和)作・北尾政美画の『「再会親子銭独楽(めぐりあひ)おやこのぜにごま』(寛政5年・一七九三年)という黄表紙が展示されているのを見つけました。これは離れ離れになった銭の親子三人が、様々な運命に翻弄されながら、それぞれ北の方、安寿姫、厨子王丸の三人の手に渡り、三人が再会を果すとともに、三枚の銭も無事再会するという話だということです。

この二作の話の筋立てが良く似通っていること、昨年四月に森三郎さんのご長女保澤やす子さんから、森三郎さんが黄表紙に興味を持っていたようだと言っていたこと(森三郎の作品を読む会 会誌『かささぎ』第2号14ページ)など、興味深く思われました。

黄表紙と言え、兄の森銑三さんが何かこの作者について書いているかもしれないと調べてみると、「黄表紙作家としての唐来三和」という論考を雑誌『歴史と國文学』昭和9年2月号から5月号に四回連載で載せていることが分かりました(『森銑三著作集』第一巻所収)。森銑三はこの中で『再会親子銭独楽』を「これはまた何ともいへずいゝ作品である。」と言い、「私は三和の作品中この『再会親子銭独楽』を以て、第一の傑作に推さうと思ふ。」と評価しています。兄銑三が唐来三和に対する熱い想いを弟三郎に語っていたらこうとは、容易に想像が付きません。

シリーズ江戸戯作「唐来三和」(桜楓社、平成元年刊)の画文と比較すると、森三郎の「めぐりあひ」で兄の四文銭が遭遇した様々な出来事、たとえば、たらいに印をつける焼印の代りにされたり、歯みがき売りの宣伝に使われたり、行燈の灯心押さえの代り役で油浸しになったりという体験は、「再会親子銭独楽」の中で親子の銭が別々に体験したことと同じ内容です。森三郎は、「再会親子銭独楽」に題材を得ながら、親子の話を、しつかりとくつついて離れない兄弟の愛情をテーマにした話に作り変えたと言っているでしょう。この話の裏に、銑三・三郎兄弟の姿が見えてくるような気がします。

「めぐりあひ」では、両替屋の七つになる娘のお千代ちゃんが、風鈴につけるべろとしてこの四文銭をもらったのに、兄が取り上げようとして、四文銭は千代ちゃんの手から離れていきます。そして最後には、さび付いて離れない二枚の銭が、縁起がいいからと根付けとして千代ちゃんの手元に戻ってきます。森三郎は江戸時代の黄表紙の話を童話に仕立てていると言えましょう。

この話については別の機会に詳しく述べたいと思っています。

次回予定 平成28年9月9日(金)午後1時~3時

『赤い鳥』昭和9年10月号初出作品「三國峠」「鼻」「など」

8月は休会です。